Libra

オープニング

男「タイトルについては」
女「てんびん」
男「とか」
女「仮想通貨」
男「とかって」
女「意味」
男「でも、必要だろうか？」
女「タイトルが？」
男「何もかもが」
女「とりあえず、今のは、なしってことで」
男「意味とか正解とか答えとか求めすぎ」
女「でも、終わったら、そっと心の中で名前をつけてくれればいいかな」
男「それは傲慢だよ」
女「むしろ、あなたの方が傲慢じゃないかしら。
名前をつけられることを拒否するんでしょ？
名前は形にはならないけれど、価値はあるから、
気軽でいいから、名付けてほしいってのが、人の心」
男「仕方ないな。名前をつけてやるから精一杯……」
男と女「（間を取ってから）生きろ！」

第二幕

男　YとNは名前を持っていない。
感覚としてそれがあるだけ。
でも、それで十分じゃあないか。
「ねえ」とか「おい」とか必要に応じて呼べば。
「散々言い尽くされたことだけど、
名前なんて記号なんだから」とYかNが。
すると「でも、名前、言い間違えられると
なんともせつないよね」とYかNが。
「腹立たしい」ってついでに。
間もなくふたりの子どもが生誕。
YとNの子どもか。
子どものYとNか。
股ぐらから芽吹く感覚。
ライブで熱狂する歓声が聞こえる。
祝祭が待ち構えてる。
YもNも名前を拒否。
理由？　感覚的に！
だから誰でもない彼／彼女になって生きてく。

女　手のひらで作った蝶がさあ、
美しく飛ぶんだよ、影絵。
男　ずくがなくて生きる気力もなかったんだけど、最近は前向き。
女　冬は鬱屈とするなあ。
男　でも、春、庭に種を蒔くのを楽しみに待っているから、
ポジティブだねえ。
女　悲しいニュースばかりだし、
新しい曲は安物ばかりでうんざりしちゃう。
空を見て、そんなことは忘れちゃう。
でもさ、わたし、ヘンだから
空か、本当にそうかって疑っちゃっていけない。
男　ゆびを指しているその先は大地かもだなんて、
砂浜に書きたいラブレター。
女　恋にやぶれたー。
男　人生に負けたー?!

女　生きることに〇も×もありませんよ。
男　目を凝らして見れば、蝶が指の先に。
女　羽根を太陽に透かしてみる。
男　でもすぐに溶けて、気になってる。
女　気が狂ってる、わたしだから、
　土を耕して、夢中になって、心を鎮めるよ。
　死んでから、気がついてね、生きてたんだって。
男　アスファルトに赤いチョークであなたの名前を。
女　わたしの名前と傘の下で並べて。
　雨が降って、地面が濡れる。
　思い出した、固める前のアスファルトに、
　種を蒔いた記憶。
男　おしっこしたい。
女　宇宙の向こう側のお花畑について考えた。
　パステルカラーがにじむ。
男　虹の果てに終わりはあるのかなあ。
女　それを考えることは哲学だから、ちょっと博識ぶる。
男　もう冬だからまた来年、種を蒔くのは。

女　リブラって単語が気になって、
　スマホに手を伸ばした時に、
　陣痛みたいな苦しみが。
　子どもを産んだ記憶はない。
　暮らしと生活。
　繰り返すだけのマネーゲーム。
　蝶が飛んでるさまを真似〜真似〜。
　生まれたばかりの子をあやしてるふり。
　楽しいから生活が、突然、終わるんだ日々は。

エンディング

女　これから始まる夢の中で
　答えを見つける？
　どこかへたどり着く？
　それはあなた次第

男　答えは知らない
　それはきみの中に
　それは夢の中に
　答えはいらない

女　芸術には答えがないって何度も。
　暮らしも生活にも、正解なんてなくて
　多分、幸せな人って、それを肯定できる人。

男　これがぼくの正解だって顔で笑えたらいいな。

女　これからが本番だって八〇歳の祖母が。

男　だったら、ぼくの先はまだまだ長いな。

女　楽しいことが待ってる、
　幸せな日々が待ち構えてる。
　知ってるけど、すっごく希望。

テキスト　なかがわよしの
構成　つかさしろみ